宗教的象徴と宗教的意味の分有の一側面
―ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火を材料として―

A Study of Participation in Religious Symbols and Religious Meanings
―with reference to Sacred Fires of the Zoroastrian Parsis in Navsari, India―

中別府　温　和

小論の目的は、宗教を理解するために宗教的象徴をめぐる事実を厳密に取り出し、それらとの関連でどこにどのような意味が共有され分有されているかを解明することである。

ここでは、ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火を材料とし、宗教的意味の残存性と太古性という視点と、宗教的なものの地域や社会による分有という視点から分析を試みた。

その結果、(1)聖なる火はその構成過程にアヴェスター時代の要素を保っていること、(2)太陽、月、水、土、樹木、動物（犬、牛、など）などの要素と複合した体系の中で聖性が意味づけられていること、(3)死体および死体悪魔への抵抗と忌避の手段として働いていること、(4)穢れを落とし浄められた状態を確保する手段として意味づけられていること、(5)聖なる火は故人および死者の魂を記念することを目的として作られること、(6)聖なる火を納める聖火殿の建設ならびに聖なる火を維持するために香木を捧げる儀礼も、故人および死者の魂を記念することを目的にしていること、(7)したがって聖なる火は一度作られたらそれを二つに割ったり、二つの火を一つに統合したりすることはできないこと、(8)聖なる火を共有する主体はそれぞれ異なっていること、が明らかになった。また、(9)聖なる火は祭司によって維持がなされていくが、その世話は聖なる火の聖性の高低に応じて定められた清浄度を達成した祭司以外はできない。その制度にもとづいて、聖なる火は現実には祭司を中心に構成される社会的組織であるパンタークをとおして共有され、その機能を果たしていることが明らかにされた。

キーワード：ゾロアスター教徒パーシー、聖なる火、宗教的象徴、分有、アヴェスター

目　次

Ⅰ　はじめに―問題と目的―

Ⅱ　方法

Ⅲ　3種類の聖なる火

Ⅳ　アータシュ・ベーラームの構成過程―収集の儀礼―
Ⅴ　聖なる火の残存性と太古性―『アヴェスター』の中の聖なる火との対比において―
Ⅵ　おわりに―今後の課題と展望―
　　注
　　引用参考文献

Ⅰ　はじめに―問題と目的―

宗教は、言語と同じように、人間の現実の生活のすべての面において生きており、人間の生に意味を与えている。同じ宗教を信じるということは、程度の差こそあれ、生活のあらゆる場面で、或る意味を共有することであり、それを分有することである。

宗教を理解するためには、どこにどのような意味がどのように共有されているのかが厳密に解明される必要がある。この課題は、野村が主張するように[1]、個人と集団の両方の面で明らかにされなければならないとともに、時間・空間、社会構造、政治経済的態度など宗教が存在する文化のすべての局面で精密に明らかにされなければならない。

言語が音声や文字で意味を伝えつつ存続変容してきているように、宗教は儀礼や象徴などをとおして、信者が生きていくためになくてはならない意味を与えながら太古から存在しつづけている。宗教的象徴ならびに宗教的意味の理解の意義はここにある。宗教的象徴をめぐる事実を解明し、それらとの関連でどこにどのような意味が共有され分有されているかを解明することは、宗教を理解するために重要な位置をしめているのである。

Ⅱ　方 法

宗教は、デュルケムやモース[2]も言うように、それが根づいている社会や文化の原初的な部分を構成している。法や経済や科学に関することは、古代においては宗教にその起源をもち、以来、さまざまな形で現代まで存続し、あるいは変容してきている。宗教の集合的な性質は、デュルケムやモースによれば、社会や文化の根底的部分に関わり、時間、空間、分類、数、などの範疇は宗教から生まれ育まれてきた。この考え方にもとづいて、小論では、宗教的なものの持つ太古性および残存性と変容という視点と、宗教的なものの地域や社会による分有という視点から分析を試みたい。

宗教的なものは太古の要素を含みつつ存続変容するという視点から分析するために、現在ナウサリ（Navsari）において行われている聖なる火に関する儀礼慣習をアヴェスター時代のそれと細かく比較する。ゾロアスター教の中のどのような内容が古くから残存し、どこが変容しているかを取りだす。次に、聖なる火にどのような宗教的意味づけがなされているかをナウサリにおけ

るフィールドワークによる資料にもとづいて明らかにする。

アヴェスター（Avesta）文献はKarl F.Geldner 1896 *Avesta Ⅲ Vendidad pp.67-68*を使用した。また、私訳はDr.Firoze M.Kotwalの精査を受けている。

グジャラーティ（Gujarati）文献は、(1)Kutar Mahiar Naoroj 1929 navsarinan pak atashbeheram sahebnan navan makanne lagto ahaval tathateno avak javakno hisab.

(2)Ervad Dara Soraji Dastur MeherjiRana 1932 Navsarina mota dastur Desai khand anoni Disapothi. Bombay (3)Rustom Jamaa Dastur MeherjiRana 1899 Athoran ni tolani Bhagarsath Vanshavali. Bombayを使用した。

Ⅲ　3種類の聖なる火

1　聖なる火の構成要素

パーシーは3種類の聖なる火を維持している。これらは火をつくる過程の儀礼、火に燃料を加える儀礼（ブイ bui　後述)、火への祈り（アータシュ・ニーアーシュ Ātaš Niyāyeš 後述）等を通してその他一般の火と区別され、それらの儀礼とそれぞれの火を構成する内容にしたがって上下の等級があり、高い方からアータシュ・ベーラーム（Ātaš Bahrām)、アータシュ・アーダラーン（Ātaš Ādarān)、アータシュ・ダードガー（Ātaš Dādgāh）と呼ばれる。語源的にはそれぞれ、「戦勝の火（the victorious king of fires)」、「もろもろの火のための火（a fire for fires)」、あるいは「もろもろの火からなる火（a fire of fires)」、「法の認める正しい場所の火（the fire in a lawful, proper place)」と理解できる。

アータシュ・ベーラームは16の異なる火から構成されている。16の火を集め、清祓し、聖別し、最終的に一つの火に統一する。16の異なる火の内容について簡単にふれると以下のごとくである（西日本宗教学雑誌、1981年第6号pp.26-29参照)。(1)死体を焼く火、(2)染め物師の使う火、(3)統治者の家の火、(4)焼物師の使う火、(5)レンガ作りの使う火、(6)苦行者の使う火、(7)金細工師の使う火、(8)貨幣の鋳造に使う火、(9)鍛冶屋の使う火、(10)兵器の製造に使う火、(11)パン焼きに使う火、(12)酒造に使う火、(13)軍人の使う火、(14)羊飼いの使う火、(15)落雷によって生じた火、(16)ゾロアスター教徒の家で使う火。

アータシュ・アーダラーンは4つの異なる火から構成されている。(1)祭司長（ダストゥルジ Dasturji）の家の火、(2)祭司（モーベッド Mōbed, あるいはエルワドErvad）の家の火、(3)平信徒（ベーディン Behdin）の中の指導者の家の火、(4)寄進をした人（聖なる火をつくった人、聖火殿を建てた人のこと）の家の火、を集め、清祓し、聖別し最終的に一つの火に統一する。

アータシュ・ダードガーは、ゾロアスター教徒の炉床から得られた一つの火を、清祓し、聖別したものである。通例、祭司長か祭司の家の火をアータシュ・ダードガーに用いる。

2　聖なる火の維持

1）聖火殿の構造

聖なる火が保たれている聖火殿は、その中にゾロアスターの肖像、太陽、月、星、牛、フラワシ（Fravaši 全ての善きものの内に存在し、そのものを生長せしめる精神実体）[3]、ザクロ、ナツメヤシ等のゾロアスター教にとって重要なシンボル群を含みつつ、他方では祭司によって伝統的宗教儀礼が行なわれ、共同の祝祭が催される聖なる空間である。その規模に異なりは見られるものの、構造は殆んど同じである。ここでナオサリの聖火殿（Ātaš Bahrām と称されている）を一例として取り上げていく。

敷地の広さは約43m四方、一階建。聖火殿の門をくぐると庭（約8m四方）があり、ここにザクロ、ナツメヤシと花々が植えてある。ザクロとナツメヤシはヤスナ（Yasna）[4] の儀礼に使用される。アッシリア風の数本の柱に支えられた上方の壁には、太陽とフラワシと火を表すシンボルが刻まれている。とりわけフラワシはナオサリの聖火殿全てに描かれている。入口には聖火殿の成立についての歴史がグジャラーティ（Gujarati）で記してある。

聖火殿の中に入ると大理石造りの壁、上方にシャンデリアが吊されている。そこにゾロアスターの肖像（高さ2.7m）と著名な祭司、平信徒の肖像が掲げてある。ゾロアスターの肖像は新年、ゾロアスターの誕生日（Khordād Sal 1月6日)、その他の祝祭日にはゾロアスター教徒によって花で飾られる。その肖像に一礼をし、それに触れる。その奥に聖火檀（Gumbad, 5m× 5m, 天井の高さ8m）を囲む祈りの部屋（一方は5m× 5m, 他方は5m× 4m）が展開する。壁には剣が掛けられ、隅には小さな鐘が吊され聖なる火にガーの始め毎に香木を加える儀礼の過程では祭司の一人が、悪思（dušmata)、悪言（duzhuxta)、悪行（duzvaršta）と発しながら3回ずつ9回ならす。

聖火檀への出入口は一つで、火の世話をする祭司のみが出入りを許される。その一つの出入口を除く他の三つの壁に窓が設けられ、真ちゅうの格子が付されている。この窓越しにパーシーは火を見つつ祈る。敷居、窓台には銀製の花輪模様が描かれ、それぞれ6枚の葉を持ち、ゾロアスター、権標、太陽、月、星、牛が刻んである。聖火檀の出入口に2，3枚の銀板が据え付けられ、ゾロアスターの姿や聖火炉やアヴェスターの祈りが刻んである。聖火檀の真中に4脚の聖火台（Ātaš X^{v}ān）に支えられた聖火炉（Āfringānyu）があり、そこで聖なる火は絶えず燃え続けている。

祈りの部屋ではゾロアスター教徒は必ず頭部を帽子やスカーフで被い、履物は脱ぐ。両手を胸の前で合わせ、頭を垂れ、聖火檀の出入口の前に立ち火に面す。聖火檀の出入口の敷居近くには丸い盆と杓が置いてある。跪き、ビャクダンあるいは金銭を盆の上に置き（čamači - ašodād)、杓に盛ってある聖なる火の灰に触れ、額に付着させる。額を敷居に接触させ、鼻を床に触れさせつつ左右に動かす。立ち上がり、火に面しつつ2，3歩後退する。そしてこの後、格子窓越しに火を見つつ火に面しながら祈る。

聖火殿には非ゾロアスター教徒、死体運搬人（Nasāsālār)、月経中の婦女子は入ることができない。これらを除くゾロアスター教徒も身体を浄め（pādyābkusti）[5]、頭部を帽子、スカーフで被って入る。聖なる火に対しては接触の禁止が加えられている。聖なる火は三方を壁によって区切られた聖火檀内に保たれ、言葉によって自由に交通し合える対象ではない。息や唾がかかっても許されない。聖なる火の世話をする祭司といえども直接接触することはできず、口許を白い布で被い、両手には白い布か手袋を着用し、杓（čamač）等の儀礼用の道具を用いて間接的に接触していく。服装も白色を条件とした一定の様式に従うべきである。聖なる火には世俗的時間と異なった時刻（Gāh）に香木が加えられる（buiの儀礼)。空間的だけでなく時間的にも世俗から分離している。一方、聖なる火へは積極的に供物（ビャクダン、金銭等）がなされ、聖なる火への祈りが唱えられる。ナオサリでは家畜（gospand Av. gav, Pahl. gawに相当し一般には牛を意味する）の肉が聖なる火に捧げられていた（Zur, Zor)[6] 事実がある。ゾロアスター教徒の聖なる火への祈りに於いては、聖なる火へは「アフラ・マズダの子」（āθrōahurahe mazdå puθra）として人格化され（ĀN.4, 5, 6, 7, 8, 10, 12, 18)、供犠と祈りに値し、供物を以って接せられるべき存在とされている（ĀN.7, 8, 14, 15)。供物を以て近づく人に対しては火は生命、知恵、子孫、活動力、勇気等を恵む（ĀN.10, 11)。聖なる火は永遠的存在であり、人をして善き報い、善き名声と魂の永き平静に与らしめる（ĀN.13)。このように積極的な意味に於いても供物、祈りの行為を通して、聖なる火は世俗から分離させられている。

2）聖火檀（グンバッド gumbad)

パーシーの聖なる火はグンバッド（gumbad）と呼ばれる聖火檀におさめられている。いったん聖火檀におさめられると、火は決して絶やされてはならない。さらに、それぞれがまったく独自な存在とみなされ、これ以後他の火と混ぜ合わされたり、また火が二つ以上に分かたれたりすることは決してない[7]。ただし、アータシュ・ダードガーは例外である。アータシュ・ダードガーには、(1)宗教儀礼の行われる場所（ウルウィース・ガー Urwis-gāhまたはヤザシュナ・ガー Yazašna -gāh）の内に儀礼にのみ用いられるべく保たれているものと、(2)聖火檀におさめられて、アータシュ・ベーラームやアータシュ・アーダラーンと同じようにパーシーの祈りの対象になるものとがあり、(1)については宗教儀礼のごとに、いくつに分かたれてもよい。

3）香木を捧げる（bui devi ブイ・デウィ）儀礼

聖火檀におさめられた火にはガー（Gāh）のはじめごとに、燃料が加えられる。ガーはパーシーが一日を刻む時間の単位で、(1)日の出から真昼まで（ハワン Havan)、(2)真昼から午後の中頃（ラピスウィン Rapiθwin)、(3)午後の中頃から日の入りまで（ウズィラン Uziran)、(4)日の入りから真夜中まで（アイウィスルスレム Aiwisruθrem)、(5)真夜中から日の出まで（ウシャヒン Ušahin）のごとくである。燃料には、バワル、ビャクダン、シタンなどの常緑喬木を乾燥

させて用いるが、ナオサリにおいてはかつて牛の糞を乾燥させて燃料として用いてもいた。

燃料の加え方については一定の儀礼がある。聖なる火に燃料を加える儀礼はブイ（bui）と呼ばれる。Pahl.buiはAv.baodhaにあたり、「香り」を意味する。パーシーは、この儀礼をブイ・デウィ（bui devi文字どおりには、芳香を与えるの意味）と呼ぶ。

アータシュ・ダードガー（３種類の聖なる火のうちの第３等級の火）には、祭司だけでなく平信徒も燃料を加えることができる。アータシュ・アーダラーン（３種類の聖なる火のうち第２等級の火）には、祭司のみがその資格のいかんをとわず燃料を加えることができる。アータシュ・ベーラーム（３種類の聖なる火のうち第１等級の火）には、祭司のみが、しかもクーブ（xūb 10日にわたるバレシュヌームという清祓儀礼を経た翌朝にヤスナの儀礼を行うこと）を終えている祭司だけが、燃料を加えることができる。

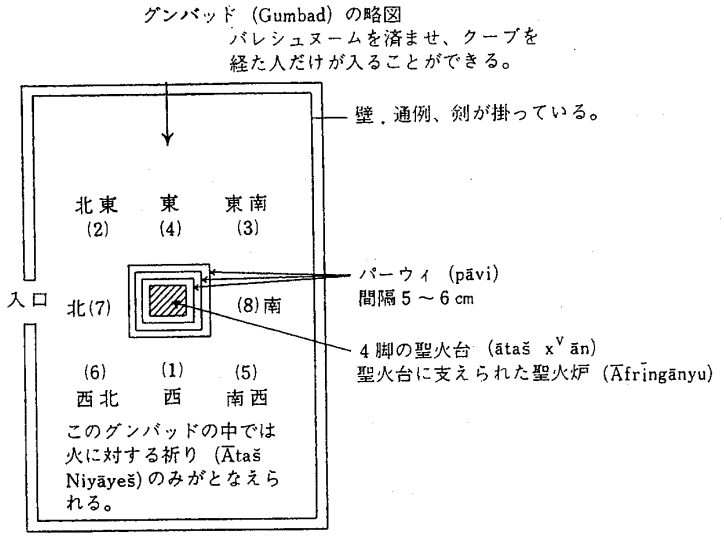
このクーブは４日間だけ有効なので、それを過ぎるとまたくりかえして行わなければならない。ブイの儀礼は、１日に５回、ガー（gāh）にそって行われる。ガーごとに聖なる火への祈り（アータシュ・ニーアーシュ Ātaš Niyāyeš）が唱えられる。アータシュ・ベーラームには、それぞれのガーごとに、11回、９回、７回、７回、６回となっているが、アータシュ・アーダラーン、アータシュ・ダードガーには一度だけでよい。燃料には、ビャクダン、シタンなどの常緑喬木を乾燥させ15～20cmの長さの片にしたものを用いるが、アータシュ・アーダラーンとアータシュ・ダードガーには一片のみ加えられるが、アータシュ・ベーラームには６片が一定の形式にそって加えられねばならないばかりか、ビャクダン、シタンに優先してバワルという常緑喬木が与えられる。

ここで、アータシュ・ベーラームのブイの儀礼にふれる。

クーブを終えた祭司は、ガーの始めに身体を浄める（クスティ・パードヤーブ kusti pādyāb）。第１、第２、第３のガーにおいては、人の魂を守るサローシュ（Sarōš）への祈り（バーシ Bāj）、それぞれのガー（gāh）の祈り、太陽への祈り，（Koršed Niyāyeš）、ミトラへの祈り（Mihr Niyāyeš）が唱えられる。第４、第５のガーにおいては、人の魂を守るサローシュへの祈り（Sarōš Bāj）、それぞれのガー（gāh）の祈り、と先の第１，２，３のガーにおける太陽への祈り、ミトラへの祈りにかわってサローシュへの祈り（Sarōš Yašt と Sarōš Hadoxt）が唱えられる。

こうして祭司は聖火檀に入る。白い手袋をつけ、乳香を少々聖なる火の上に置き、つぎに６片のビャクダンを聖なる火の上に以下のごとく加える。祭司は聖火炉の前に東に面して立ち、ビャクダン２片を西→東の方向に置く。つぎに南に面して立ちビャクダン２片を北→南の方向に置く。それから西に面して立ち、東→西の方向にビャクダン２片を置く。一組２片のビャクダンは３段に重なるように、しかしそれぞれは別々に離して置かねばならない。このようなビャクダンの組み方はマーチ（māči 王座の意味）と呼ばれ、この儀礼のためにビャクダンをささげる行為もマーチと言われている。

祭司はマーチを終えると、聖火炉を支える石板（クワン x^{v}ān）を水で洗う。このとき「アフラ・マズダのよろこびのために」（xšnaōϑra Ahurahē Mazdaō）とアシェム・ヴォフーの祈り（Ašem Vohū「正義は絶対の恵み。正義は美徳。最高の正義を聖別する人は幸福」）を3回唱える。つぎに、善思（フヴァルシュタ Hvaršta）と声に出して言いつつ、ビャクダンと乳香を聖なる火に加え、手に金属製の杓（čamač）をもって、聖火炉のまわりを廻る（チャク・ファルウン čak farvun, 円をまわる）。



祭司は(1)～(8)の順にまわり、それぞれの地点でつぎのように祈りを唱える。（J.J.Modi pp.236-237）

(1)「火を通して、御身アフラ・マズダを崇める」

(2)「善思の供えを通して、御身アフラ・マズダを崇める」

(3)「火を通して、御身アフラ・マズダを崇める」

(4)「善言の供えを通して、御身アフラ・マズダを崇める」

(5)「火を通して、御身アフラ・マズダを崇める」

(6)「善行の供えを通して、御身アフラ・マズダを崇める」

(7)「われらの思想の啓かれるよう」

(8)「われらの言葉の啓かれるよう」

(9)「われらの行為の啓かれるよう」

これらの祈りを唱えると、祭司は聖なる火の上にビャクダンと乳香を置き、先に述べたように、ガー（gāh）にそって聖なる火への祈り（アータシュ・ニーアーシュ Ātaš Niyāyeš）を決められた回数唱える。それを最初に唱えるときは、はじめの部分において、もう一人の祭司は悪思（ドゥシュマタ dušmata）悪言（ドゥズクタ duzhuxta）悪行（ドゥズワルシュタ duzvaršta）と発しながら鈴を3回ずつ9回ならす。また、第1回のアータシュ、ニーアーシュの終わりの部

分においては、祭司は杓で聖火炉の灰の上に2つの円をえがく。この円は第2回目のアータシュ・ニーアーシュを唱え終わったときに消される。

3　聖なる火の共有

ナオサリには9つの聖なる火がある。アータシュ・ベーラーム1、アータシュ・アーダラーン3、アータシュ・ダードガー5のごとくである[8]。

ナオサリ・パーシーの火

〔Ⅰ〕 アータシュ・ベーラム　(Ātaš Bahrām)
(1) バガサス・アンジュマン・アータシュ・ベーラーム
(the Bhagarsath Anjuman・Ātaš Bahrām)

〔Ⅱ〕 アータシュ・アーダラーン　(Ātas Ādarān)
(1) ミノチャ・ホムジ・アーダラーン
(the Minocher Homji Ādarān)
(2) サー・サエブ・アーダラーン
(the Sir Saheb Ādarān)
(3) タウディ・アンジュマン・アーダラーン
(the Tavdi Anjuman Ādarān)

〔Ⅲ〕 アータシュ・ダードガー　(Ātaš Dādgāh)
(1) バガサス・アンジュマン・アータシュ・ダードガー
(the Bhagarsath Anjuman Ātaš Dādgāh)
(2) バガサス・アンジュマン・アータシュ・ダードガー
(the Bhagarsath Anjuman Ātaš Dādgāh)
(3) マレッサ・ベーディーン・アンジュマン・アータシュ・ダードガー
(the Malesar Behdīn Anjuman Ātaš Dādgāh)
(4) ルンスィクイ・コトワル・オーファネッジ・アータシュ・ダードガー
(the Lunsikui Kotwal Orphanage Ātaš Dādgāh)
(5) サマスト・アンジュマン・アータシュ・ダードガー
(the Samast Anjuman Ātaš Dādgāh)

聖なる火の成立年代は、18Cの中葉から20Cの初めにわたるが、それらの沿革の概容は次のとおりである。

1）アータシュ・ベーラム（Ātaš Bahrām）

ウドワダ（Udvada）にあるアータシュ・ベーラムは、パーシーの間ではイラン・シャー（Iran shah：the King of Iran）と呼ばれて、他のアータシュ・ベーラムとくらべて一段と高い宗教的意味と聖性が付与されている。それは(1)イランシャーが、インドにおいてパーシーが聖別した最初の火であること、(2)イランのアータシュ・ベーラムの灰が陸路運ばれてきて、

イラン・シャーの聖別の儀礼の中で用いられたことで（F.M.Kotwal, 1977：664）イランのアータシュ・ベーラムと直につながっているという証し（silsila）を実感できること、(3)イラン・シャーも他のアータシュ・ベーラムと同じく16の火から成っているが、その中に落雷によって生じた火を含み、この事実がパーシーに何らかの神秘的な感情をいだかせていること、などの理由からと考えられる。

イラン・シャーはパーシーがグジャラート州のサンジャン（Sanjan）に移住して（936 A.D.）まもなく創設された。その後、バルート（Bahrut）→バンスダ（Bansda）→ナオサリ（Naosari）→スラート（Surat）と運ばれて、1742年ウドワダの聖火殿におさめられた。

イラン・シャーがナオサリからウドワダへ運ばれると、1765年、ナオサリにアンジュマンによってアータシュ・ベーラムが設けられた。他に、デサイ・クルシェドジ・テムルジ（Desai Khurshedji Temulji）によって建てられたとする説もある。最初のボイ（boy またはブイ buy）はダストゥルジ・ソラブジ・ラスタムジ・ラーナ（Dasturji Sorabji Rastamji Meherji Rana）が行った。またこのアータシュ・ベーラムは1776年一時スラートに移された。

2）ミノチャ・ホムジ・アーダラーン（Minocher Homji Ādarān）

ミノチャ・ホムジ（Minocher Homji）はもともとバガサス祭司で、バジャン（Bajan）家の出身だったのだが、1686年、自分の家の敷地内にアギーアーリー（Agīārī）を創設、バガサスの火と区別し、ノン・バガサスのパーシーのための聖火とした。1862年5月10日、ミノチャ・ホムジ家の人々がボンベイのワディア家（Wadia family）に火の維持を依頼する。この申し出はマネクジ・ナオロジ・ワディア（Maneckji Naoroji Wadia）とジャハンジル・ヌサルワンジ・ワディア（Jahanjir Nusarvanji Wadia）に受け入れられた。1898年11月3日、この聖火殿の改修がなされている。今日でも、ノン・バガサス・パーシーだけでトラスト（trust）が組まれ、アーダラーンが維持されている。

3）サー・サエブ・アーダラーン（Sir Saheb Ādarān）

マレッサ区域（Mallesa）のジャムシェドジ・ジジボイ（Jamshedji Jeejeebhoy）が、1853年3月14日に、フラムジ・ヌサルワンジ（Framji Nusarwanji）の霊にささげて創設した。

4）タウディ・アンジュマン・アーダラーン（Tavdi Anjuman Ādarān）

1869年、タウディのアンジュマンによって創設される。ナオサリからは、祭司長とデサイ家の人々が参加し、マネクジ・ベーラムジ・タワディア（Maneckji Beheramji Tavadia）、ナナバイ・シャプルジ・パテル（Nanabai Shapurji Patel）が指導にあたった。1900年4月15日、改修された。ダダチャンジ家の祭司が火の維持にあたり、火そのものはダードガーであった。

1900年12月22日、ダードガーがアーダラーンに格上げされる。24の家から火が集められたが、

その中にはナオサリの祭司長、デサイ家、ミノチャホムジ家、ダダチャンジ家からの火が含まれる。6組の祭司が聖別に必要な儀礼を行い、アーダラーンはホルムスジ・クルワルジ・タワディア・アーダラーンとして知られるにいたった。クルワルジ・カスワジ・タワディア（Kurvarji Cawasji Tavadia）が息子の霊にささげて創設したからである。タウディとナオサリの学校は当日すべて休校になった。

5）ワディ・ダリメール（Vadi Dar-i-Meher）

かつては火はおさめられていなかったが、今日では二つのダードガーが別々のグンバット内に保たれている。エルワド・クルシュドジ・サーイアール（バガサス祭司）（Ervad Khurshedji Sahiar）がRs.25000を寄附し、1929年に創設した。

2つのダード・ガーのうちのひとつを、バガサス・アンジュマンのムクタード・トラスト（Muktad Trust）とバージ・ロージ・ガー・トラスト（Bajroj-gah Trust）が維持している。デサイ家（Desai）が改修の費用を負担した。もう一つのダード・ガーは建物の北側に保たれて、ワディア家（Wadia）によって維持されている。これは1851年に、モトランバイ・ワディア家（Motlanbai Wadia）がジェハンジル・ワディア（Jehanjir Wadia）の霊にささげて（in the pious memory of, with the xšnuman of）創設した。ナオロジ・マネクジ・ワディア（Naoroji Maneckji Wadia）がRs.6000の費用を寄附し改修した。この際、クルシェドジ・カワスジ・デサイ（Khurshedji Cawasji Desai）からRs.500、ダンマイ・アルジャニ（Dhanmai Arjani）からRs.1000の寄附があった。1930年3月21日に、クルシェドジ・サヒアル（Khurshedji Sshiar）にマンパトラが与えられ、聖火殿の柱、ドア、窓の改修がアッシリア風に行われるとともに、階上はアヴェスターならびにパフーラヴィのための教室にあてられた。

6）コトワル・オーファネジ・アータシュ・ダードガー（Kotwal Orphanage Ātaš Dādgāh）

この火は、ボンベイのマズガオン（Mazgaon地名）からナオサリへ運ばれ、1923年にベーラムジ・スイルワイ（Behramji Sirwai）が創設した。ベーラムジ・スイルワイ・ドスィワイ（Behramji Sirwai Dosiwai）の両親のためにのみバージ（Bāj）とムクタード（Muktad）が行われる。

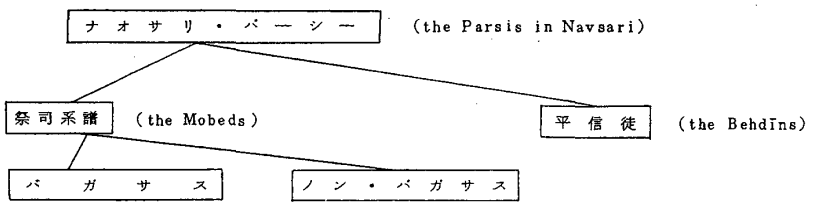
7）サグリ（Sagri）の火

ナオサリには一つしかないが、サグリの火をおさめる堂（Sagri）（タテ43フィート、ヨコ51フィート、高さ15フィート、堂の南側にサグリがおさめられている）は他に2つ残っている。それぞれのダクマ（Daxma 鳥葬の塔）にはサグリの火が別々に付設されなければならない。かつてナオサリには5つのダクマがあったと記録されている（B.B.Patel, 1898：71）ので、5つのサグリが存在した。今日では、バガサス祭司、ノン・バガサス祭司、平信徒が一つのダク

マを共有しているので、サグリは一つになったと考えられる。

1616年5月23日にクルシェドジ・カハンジ（Khurshedji Kahanji）が、1821年4月4日にホルムズジ・マンチェルジ・ババ（Hormuzji Mancherji Bhabha）が、それぞれサグリを創設した。1857年には、ジャムシェドジ・ジジボイ（Jamshedji Jeejeebhoy）の霊にささげてサグリが創設され、同時にダクマのそばに井戸が設けられた。同年、息子のジャムシェドジ・ジジボイ2世の霊にささげて改修も行われた。1878年7月11日、長男のクルシェドジ・ジャムシェドジ・ジジボイ（Khurshedji Jamshedji Jeejeebhoy）の霊にささげて改修が行われた。1878年3月7日、ディンシャ・マネクジ・ペティト（Dinshaw Maneckji Petit）が母のハマバイ・ペティト（Hamabai Petit）の霊にささげてサグリを創設した。このような歴史を経たサグリが、同日ナオサリのサマスト・アンジュマン（Samast Anjuman）に引き渡された。Rs.3000が寄附され、マンパトラがディンシャ・マネクジ・ペティトに与えられた。

これらのナオサリの聖なる火について注目すべきことのひとつは、それぞれの火を維持してきた主体が異なることである。すでにふれたように、ナオサリのパーシーは、祭司系譜に属するパーシーと平信徒に分かれ、祭司系譜に属するパーシーは、バガサスとノン・バガサスに分かれている。祭司系譜に属するパーシーと、平信徒のそれぞれの居住区域は明らかに異なり、通婚はかつては禁じられ今日でもきわめて希である。聖なる火は、祭司系譜に属するパーシーと平信徒によってまったく別々に維持されてきた。さらにバガサスとノン・バガサスによっても別々に維持されてきた。Minocher Homji Ādarān がこれにあたる。ミノチャ・ホムジはもともとバガサス祭司であったが、1686年に自分の家の敷地内にアギーアーリー（Agīārī聖火殿）を建て、バガサスの火と区別した。



火	バガサス	ノン・バガサス	平信徒
アータシュ・ベーラム	バガサス・アンジュマン・アータシュ・ベーラム		
アータシュ・アーダラーン		(1) ミノチャ・ホムジ・アーダラーン	(1)サー・サエブ・アーダラーン (2)タウディ・アンジュマン・アーダラーン
アータシュ・ダードガー	(1)バガサス・アンジュマン・アータシュ・ダードガー（アータシュ・ベーラム内に在る） (2)バガサス・アンジュマン・アータシュ・ダードガー（ワディ・ダリメール内に在る） (3)ルンスィクイ・コトワル・オーファネッジ・アータシュ・ダードガー		(1)マレッサ・ベーディーン・アンジュマン・アータシュ・ダードガー
	サマスト・アンジュマン・アータシュ・ダードガー		

聖なる火を維持する主体が異なるという意味は次のごとくである。聖なる火をつくり、聖火檀におさめ、聖火殿を建て、あるいは修復しつつ、その中でたえず聖なる火を維持すべく、特定の祭司に宗教儀礼を委任していくのに必要な財物をまかなう主体が異なる。異なる火に燃料を加え、火を絶やさないようにしうるのは祭司のみであるし、聖火殿の中で行われる宗教儀礼は、たとえそれが祭司系譜に属するパーシーから指示されたものであれ平信徒から指示されたものであれ、特定の祭司のみが行いうるものであるから、この意味で祭司はすべての聖なる火に深くかかわっている。かつてはアータシュ・ダードガーにがぎって平信徒が世話できたが、この事実は、聖火殿に永続的に火が維持されるようになる以前のことである。

しかし、聖なる火に燃料を加え、聖なる火に祈りを唱え、聖火殿の中で宗教儀礼を行いつつ聖火の維持の一部を担っている祭司たちは、それぞれのパンターク（panthāk 仏教における檀家に類似している）をもつ。パンタークは小さいもので10世帯、大きいもので100～200世帯にいたる。祭司は一定の経済的報酬のもとで、誕生、イニシエーション、婚姻、葬送に関した宗教儀礼、死者の霊魂のための宗教儀礼、祝祭における宗教儀礼をそれぞれのパンタークの家の中で、あるいは聖火殿の中で行う。聖火殿は10～15のパンタークの上になりたっている。パーシーの生活は、パンタークを通して聖火殿との深いつながりをたもちながら展開している。パーシーであるかぎり、どこのどの聖火殿に入ることもさまたげられないし、その中で祈ることも自由である。しかし、パーシーの現実の生活と深くつながっているパンタークはそのまま保たれる。

このような意味で、聖火殿を維持する主体が異なるということは、その維持にかかる経済的負担をまかなう主体が異なるだけにとどまらず、祭司を通してパンタークによって聖火殿にかかわる主体も異なってくるのである。それぞれの聖火殿はきわめて独自性が強い。聖なる火そのものも決して２つに分かたれたり、２つの聖なる火が１つに混ぜ合わされたりされないし、さらに聖なる火を消してしまうことはあってはならない、という意味で独自性をもっているが、つぎにとりあげるブローチにおける聖なる火に関する一件は聖火殿の独自性の一面をよく描き出している。

ナオサリの近くのブローチ（Broach）で、祭司の不足と聖火殿を維持する費用の不足から、アータシュ・アーダラーンが消失してしまった。聖なる火を消してしまうことは決してありえないことのはずなのに、パーシーはこれについてまったく無関心ではなかったにしても、結果的にはこれを立て直そうとはしなかった。

また、聖火殿を建て、これを維持修復していくことが、個人、一族を単位として担われ、しかもそれぞれが関わり合いをもつ故人の霊にささげてその行為がなされる。ナオサリにおいては９つの聖なる火のうち８つがそうである。パーシー全体についてみると、８つのアータシュ・ベーラームの中の７つがそうであるし、133の聖なる火ならびに聖火殿のうち118（約９割）がそうである。

4　聖なる火とその他の火

聖なる火につては、先にふれたように、定められた儀礼を加えて一般の火と区別している。パーシーが火一般に関心をはらわないというのではない。ナオサリにおいては、自分の家の一角とりわけ台所の近くの片隅に火をともしつづけ、その火を料理には用いず、もっぱらその火の前で祈るためにだけ保っている。パーシーがパーシー以外の人々の使う火についてどのように考えているかについてはいまだに調査をしえず、その内容にふれることはできないが、少なくともパーシーの社会の内では一般の火についても大切にとりあつかう。小さな容器に油を入れ、灯心をひたし、火を保つ行為はほとんどのパーシーによってなされている。

しかし、パーシーは、そのような火と、聖火殿に維持されている聖なる火とは区別している。質的な差をそこに見いだし、3種類の聖なる火の等級に応じてその聖度が異なると意識している。先にふれたように、パーシーはパンタークを通してそれぞれの聖火殿とつながり、祭司によっていろいろな儀礼を行ってもらう。アータシュ・アーダラーンのパンタークとして祭司に儀礼を行ってもらった場合とアータシュ・ダードガーのパンタークとして祭司に儀礼を行ってもらった場合、その儀礼そのものへのパーシーの評価は同じである。なぜならば、儀礼に用いられる聖なる火はいかなるときもアータシュ・ダードガーでなければならないからである。しかし、その儀礼を行う前にしろ行った後にしろ、アータシュ・ベーラームにでかけ、そこで祈るパーシーはきわめて多い。アータシュベーラームの灰みが聖なる灰だということはほとんどのパーシーが知っている。この灰はバサム（Bhasam Av. ātryō-paiti irista, Pahl. Ādurastar）と呼ばれ、清祓儀礼に用いられるだけでなく、祈りのあとで祭司によって額につけてもらう。ナオサリのアータシュ・ベーラームやウドゥワダ（Udvada）のアータシュ・ベーラームを巡礼するパーシーも少なくない。

Ⅳ　アータシュ・ベーラームの構成過程―収集の儀礼―

ここで、パーシーのあいだでつくられ維持されてきた聖なる火のうちでもっとも等級の高いアータシュ・ベーラームについて、その収集の過程にかぎって言及していく。収集の儀礼につづく、火を清祓する儀礼、聖別の儀礼に関する内容は別稿にゆずりたい。

アータシュ・ベーラームに限定した理由は、先にもとりあげたように、この聖なる火はパーシーによってもっとも聖度が高いと考えられていることのほかに、バガサス祭司によって維持されているからである。ゾロアスター教の伝統的な部分を多く保っていると思われるバガサス祭司の慣行にそって、聖なる火の収集の儀礼を記述し、『アヴェスター』グジャラティの文献を参考しつつ古い部分とのつながりを見いだそうとする。

アータシュ・ベーラームは16の異なる火から構成されていることはすでに述べた。16の火のなかの1つは死体を焼く火である。この火はナス・パーク（Nasupāk）といわれている。Nasuはゾロアスター教の中で重要な概念のひとつである。パーシーはナスを①ヒックラ（hixra：乾い

たナス）と②ナス（Nasu：湿ったナス）に分け、前者に髪、爪、死体から得られた骨が含まれ、後者には血、唾、膿汁、死体が含まれるという。ナスは「他を汚す力」のそなわった不浄の主体と考えられている。火を収集する儀礼はこの死体を焼く火についてのみとりあげる。16の火の収集の儀礼には、後にふれるように若干の相違がみられるが、その他の内容については死体を焼く火の収集の儀礼に言及していくことで十分であろう。

パーシーは決して死体を焼かない。この場合は非ゾロアスター教徒によって死体は焼かれている。平信徒のパーシー一人が、死体を焼いている非ゾロアスター教徒のもとへ行き、死体を焼いている火の一部をとりだしてくれるように頼む。これを拒まれたり、死体が焼かれている場に非ゾロアスター教徒がいないときは、パーシーはつぎのような儀礼にうったえて死体を焼いている火をとりだす。

平信徒のパーシー二人が身体を浄める儀礼（パードヤーブ・クスティ pādyāb kusti)[9] を行い、二人の間に手で紐を保ち（パイワンド Paiwand)[10]、死者の霊魂を守護する天使（ヤザタ yazata)、サローシュ（Sārōš)[11] のための祈りを唱え（サローシュ・バージ Sārōš Bājをアシャエ asaheの箇所まで)、死体が焼かれている所へ行く。二人は一方の手に、穴のあけられた鉄製の杓（チャマチ čamač）をもち、その上には粉状のビャクダンと乳香が盛ってある。この杓を死体を焼いている火の上方およそ36～40cmに保ち、自然に燃えつかせる。こうして得られた火は、空き地の地面に置かれる。二人の平信徒は今や祈り（バージ Bāj）を終え、清浄儀礼（リマン riman)[12] を行わねばならない。空き地の地面に置かれた火から約30～40cm離れた地面に、粉状のビャクダンと乳香を盛る。この際は、風の力を利用し、風上に置かれた火は風の力でビャクダンと乳香に自然に燃えついていく。もとの火は消火してよいが、燃えついた方にはビャクダンと乳香があらたに加えられる。

この作業は死体を焼く火については91回くりかえされるが、その他15の火については、くりかえされる回数が異なっている。以下それを示す。染め物師の使う火80回、統治者の家の火70回、焼き物師の使う火61回、レンガ作りの使う火75回、苦行者の使う火50回、金細工師の使う火60回、貨幣の鋳造に使う火55回、鍛冶屋の使う火61回、兵器の製造に使う火61回、パン焼きに使う火61回、酒造に使う火61回、軍人の使う火35回、羊飼いの使う火33回、落雷によって生じた火90回、ゾロアスター教徒の家で使う火184回、のごとくである。最後のゾロアスター教徒の家で使う火は、祭司長の家で使う火、祭司の家で使う火、平信徒の家で使う火をそれぞれ集めてきて、それらをひとつの火に統一する。この火について先の作業を40回くりかえす。こうして得られた火に、火打ち石でおこされた火か木片の摩擦によっておこされた火の一方を加えて、ひとつの火に統一する。この火について先の作業を144回くりかえす。

16の異なる火について、一定の回数儀礼をほどこしてえた火が、この収集の儀礼につづく清浄の儀礼に用いられる。

V　聖なる火の残存性と太古性—『アヴェスター』の中の聖なる火との対比において—

さて、時代をさかのぼると、この収集の儀礼を想起させる内容が『アヴェスター』の中に見出せる。火の収集の儀礼は、死体を焼く火に限って述べてきた。その際火を収集するゾロアスター教徒がリマン清祓儀礼を行わねばならないことと、死体を焼く火の炎から穴のあいた杓に盛られたビャクダン、乳香に火を燃えつかせねばならないことは、他の15の火にあてはまらないにしても、その後につづく儀礼の内容は、回数こそ異なれ同じである。この死体を焼く火に言及しているのが『アヴェスター』、『ヴィデーヴダード（vidēvdād）』第8章73-76節である。以下、その訳をかかげる。

第8章　73節

Dātarə gaēϑanam astvaitinam aṣāum
yaṯ aēte yōi mazdayasna pāδa ayaṇtəm vā tačantəm vā barəmnəm vā vazəmnəm vā ātarəm nasupākəm frajasạn nasūm hạmpačan nasūm hāvayan kuϑa tē verezyạn aēte yōi mazdayasna.

「物質世界の聖なる創造者〔アフラ・マズダ〕，マズダヤスナ教徒（Mazdayasna）が，歩いているとき，あるいは走っているとき，あるいは〔馬に〕乗っているとき，あるいは馬車に乗っているとき（vazəmnəm），死体を焼く火（Nasupākəm）の近くにきたとき，かれら〔マズダ・ヤスナ教徒〕は死体（Nasu）を熱すべきでしょうか（hạm-pačan），死体を焼くべきでしょうか（hāvayạn），かれらマダヤスナ教徒はいかがすべきでしょうか.」

第8章　74節

Āaṯ mraoṯ ahurō mazdå ava aētəm nasupākəm janaēta ava hē janayən apa aētạm dištạm barayən apa aētəm uzdānəm barayen.

「アフラ・マズダ答えていわく，この死体を焼く火を打ちくだけ（janaēta），この死体を焼く火を打ちくだけ，この燃えている薪（dištạm）を遠くへ運べ（apa barayen），死体をつけて燃えている薪（uzdānəm）を遠くへ運べ.」

第8章75節

Āϑraṯ hača bānuwē aēsmą frasao (—) čayāhi yaṯ vā aētaŋhąm urvaranąm yaṯ ātarə—čiϑranąm yaṯ vā aētəm ātarəm uzdarəzə aētayå urvarayå ātarəčarəš vīča barōiṯ vīča ṣāvayōiṯ yaϑa āsištəm frāvayōiṯ.

「その〔死体をつけて燃えている〕火から離れて，炎（bānuwē）を通して，火の精をもつ木の片（ātarə-čiϑranąm）か，あるいは燃えつきやすい木の片（ātarə čareš）に，その〔死体をつけて燃えている〕火を移らせよ，その〔死体をつけて燃えている〕火を遠くへ運べ，死体を焼く火を散らしてしまえ（vīča ṣāvayōiṯ），死体を焼く火がそれだけ早く消えるように（frāvayōiṯ）.」

第8章76節

yaϑa taδa paoirīm handarəza zəmē aētaṯ paiti nidaiϑīta avavaṯ hača āϑraṯ nasupakāṯ yaϑa fratarə vītastiš vīča barōiṯ vīča ṣāvayōiṯ yaϑa āsistəm frāvayōiṯ.

「そして，最初の薪の束（handarəza）を地面に置くべし，死体を焼く火からおよそ 23 cm（vītastiš）離れたところに，〔死体を焼く火を〕遠くへ運べ，〔死体を焼く火を〕散らしてしまえ，死体を焼く火が，それだけ早く消えるように.」

1　ナウサリの聖なる火と『アヴェスター』の聖なる火

ナオサリにおける火の収集儀礼と『アヴェスター』第8章73～76節の内容を比較すると、後者においては死体を焼く火（Nasupāk）に限られてはいるにもかかわらず、火の炎を通して燃えつきやすい材料に火を燃え移らせ、さらにその作業を何度かくりかえす仕方に類似がみられる。

『アヴェスター』にいう薪の束（handarəza）は、ナオサリの場合のビャクダン、乳香ではないかも知れない。『アヴェスター』においては、「歩いているとき、あるいは走っているとき、あるいは[馬に]乗っているとき、あるいは馬車に乗っているとき」と表されているように、73～76節の状況は聖なる火をつくるためのものとは考えにくい。しかし、『アヴェスター』文献の中には、他に73～76節に記されている儀礼と同じものにふれている箇所がないこと、また第8章73～76節につづく81～96節の内容を参照するときに、第8章73～76節とナオサリにおける慣行との類似はまったく意味のないことではないと思われる。81～96節（これに関しては西日本宗教学会誌

第６号pp.26-29参照）には、16の異なる火が一節ごとに１つずつ紹介され、それらを「火の運ばれるべき、法の認める正しい場所」(Dāıtīm gātūm）に運ぶべしとし、その行為に対しては、「燃え木」（ātaresaokanạm）の数量で計った分の報いがあることが述べられている。ここでも、16の異なる火について、「燃え木」の数は相違しているし、聖なる火をつくるために16の異なる火を収集するように規定しているのでもないが、火を運ぶ行為そのものは、運ぶ火の内容は異なるにしても、火を絶やすまいとする態度であろうし、少なくとも、徳であると考えられている。

2　聖なる火の移動

ここで、火を運ぶ行為に言及していく。『アヴェスター』から時代をくだって、おそくとも15Cから17Cのイランにおいては、火を運ぶということに関して以下のような慣行があった（B.N. Dhabhar, 1932, pp.56-72)[13]。

ゾロアスター教徒の家で使われる火は、３日使われたら、その火の炎を通して燃えやすいものに火は燃え移らされ、燃えついた方の火は、アータシュ・アーダラーンに運ばれ、そうして４ヶ月と10日を経て、アータシュ・アーダラーンはアータシュ・ベーラームに運ばれなければならない。４ヶ月を経て、それができないときは、１年以内にそうすべきである。ゾロアスター教徒の家で使われる火が、アータシュ・アーダラーンに運ばれると、それは徳であり、もしその火が運ばれずに消されると罪であり、その家の財は減り、男子の後継ぎも減る。この慣行は、ゾロアスター教徒の家の火に言及するのみで、『アヴェスター』におけるようなその他15の異なる火についてはふれていないものの、火を一定の場所に運ぶべしとし、その行為そのものを徳とする方向では類似している。ここでは、火を消し絶やさないようにする態度が強調されているように思われるが、これとは異なる目的から火を運ぶ行為に言及しているものもある。

同じく15C～17Cのイランにおいては、すべての平信徒の居住区には、少なくとも平信徒が10世帯集まったら、その中央に、アータシュ・アーダラーンをつくるべきだとしている。平信徒は、自分の家の火を3日ごとに、あるいは7日ごとに、アータシュ・アーダラーンに運び、１年ごとにあるいは３年ごとに、しかも年の終わりのガー（Gāh）のときに、アータシュ・ベーラームへ運ばねばならない。パーシーは１ヶ月を30日で区切り、12ヶ月をもって360日とし、これに５日を加えて１年365日とするが、この５日はガーハンバール（Gāhambār）と呼ばれ、家族あるいは村、町単位でいろいろな儀礼を行ったり共食に参加したりする。

ここではアータシュ・アーダラーンをつくることを強調した上で火を運ぶことにふれている。『アヴェスター』の場合には、聖なる火をつくるために火を運ぶべしとはしてないが、15C～17Cにおいては聖なる火をつくらねばならないとする態度がみられるのである。

火を運ぶ行為の内容を具体的に示すことは困難であるが、例えばアータシュ・ダードガーをアータシュ・アーダラーンに運び、火と火の間にパイワンド（paiwand注(10)を参照）として杓（čamač）や木片を用い、アータシュ・ダードガーが消えるのを待つ方法は今でも行われている。

アータシュ・ダードガーとアータシュ・アーダラーンとの間でこれを行うのは、どのパーシーにも許されているが、アータシュ・アーダラーンとアータシュ・ベーラームとの間でこれを行えるのは祭司だけに限られている。

3　ナウサリにおける聖なる火と聖火殿

ナオサリでは、聖火殿を、その中におさめられている火の名称でナオサリ・アンジュマン・アータシュ・ベーラーム、ミノチャ・ホムジ・アータシュ・アーダラーンなどと呼ぶこともあるが、通例はダ・リ・メール（Dar-i Mihr文字どおりには、ミトラの門の意味)、あるいはアギーアーリー(Agīārī 火の家）と呼んでいる。呼称のいかんにかかわらず、すべての聖火殿には聖なる火が維持されているのだが、かつては火が永続的に維持されてはいなかったという史料が残っている[14]。この史料によると、パーシーは自分の家のかまどの火に対して祈りと供犠をなしていた。15C～17Cのイランにおいても、聖なる火に羊や山羊の肉を供犠（ZurあるいはZohar）していた(B.N.Dhabhar, 1932 pp.64-72)。

しかし祭司が儀礼を行う場所や建物は必要であると考えられ、儀礼堂ともいうべきものが建てられた。この儀礼堂には、パーウィ（Pāvi 5～6㎝の幅の浅い溝で囲まれた儀礼を行うための空間)、井戸、ヤシの木、ザクロの木が付設していた。パーシーの祭司は、自分の家のかまどの火を日々この儀礼堂内のパーウィに運び、その火を聖別しては儀礼に用い、儀礼を終えるとその火をもって家に帰っていた。

ナオサリに存するダ・リ・メールは最も古く、12Cにカムディン・ザルトシュト（Kamdin Zartosht）という祭司によって建てられたが、先に述べた慣行はつづけられ、それは儀礼堂の役割は果たしつつも、その中に永続的に維持されるべき聖なる火は存せず、1796年にはじめて聖別された火がおさめられた。

それゆえに、15C後半、サンジャン（Sanjan 略図参照）の祭司が、ナオサリにアータシュ・ベーラームを運び込んで、聖火殿におさめ、そこでなおさりのパーシーのために宗教儀礼を行ったとき、ナオサリのパーシーはこの聖火殿をかれらの他のダ・リ・メールから区別してアータシュ・ニー・アギーアーリー（Ātaš-ni Agīārī 火のおさめられているアギーアーリー）「大きなミトラの門」(The Vadi Dar－i Mihr)、「大きな、火の家」(The Moti Agīārī）または「古い、火の家」(The Juni Agīārī）などと呼び、他のダリメールと区別している。

Ⅵ　おわりに—今後の課題と展望—

8Cの中葉から11C～12Cにかけて、イランから主にインド西北部に移住したゾロアスター教徒パーシーは、自分の家のかまどの火に対して祈り、供犠をする慣行を15C後半ぐらいまで保っていたが、15C～17Cにわたって、イランのゾロアスター教徒とのあいだに書簡の交換、祭司の交流を行い、それを通してイランにおいては聖なる火をつくっている事実を知らされ、その後18C～19C後半にかけて数多くの聖なる火と聖火殿をつくったと考えられる。

『アヴェスター』第8章73～96節には、聖なる火をつくるために、死体を焼く火を浄め、死体を焼く火を含め16の異なる火を「火を運ぶべき、法の認める正しい場所」に運べとの規定はないが、遅くとも15C～17Cには聖なる火をつくる慣行が存した。パーシーはイランのゾロアスター教徒の祭司との接触によって、聖なる火をつくる事実に接し、インドにおいて18C～19C後半にかけてそれを実行したのであろう。『アヴェスター』の含みうる時代に、聖なる火を現在ナオサリにおけるように作っていたかどうかは現時点では判然としない。しかし、『アヴェスター』とグジャラティの文献によるかぎりでは、『アヴェスター』第8章73～80節における死体を焼く火を忌避する態度、またそれに関する儀礼、さらに『アヴェスター』第8章81～96節に含まれる16の異なる火とそれらを一定の場所に運ぶ慣行は、現存するゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火をつくる過程の一部である、16の異なる火を集める儀礼に類似していると考えられる。

聖なる火をめぐる意味づけと儀礼慣習は非常に複雑である。聖なる火は聖火殿の中の聖火壇に保持され、世俗的時間と異なった時刻に香木が加えられる。聖なる火は空間的だけでなく時間的にも世俗から分離している。一方、聖なる火へは積極的に供物（ビャクダン、金銭等）がなされ、聖なる火への祈りが唱えられる。ナオサリでは家畜の肉が聖なる火に捧げられていた事実がある。聖なる火への祈りに於いては、聖なる火は「アフラ・マズダの子」として人格化され、供犠と祈りに値し、供物を以って接せられるべき存在とされている。供物を以て近づく人に対しては火は生命、知恵、子孫、活動力、勇気等を恵む。聖なる火は永遠的存在であり、人をして善き報い、善き名声と魂の永き平静に与らしめる。このように積極的な意味に於いても供物、祈りの行為を通して、聖なる火は世俗から分離させられている。

いったん聖火檀におさめられると、火は決して絶やされてはならない。さらに、それぞれがまったく独自な存在とみなされ、これ以後他の火と混ぜ合わされたり、また火が二つ以上に分かたれたりすることは決してない。ただし、アータシュ・ダードガーは例外である。

アータシュ・ダードガーには、祭司だけでなく平信徒も燃料を加えることができる。アータシュ・アーダラーンには、祭司のみがその資格のいかんをとわず燃料を加えることができる。アータシュ・ベーラームには、祭司のみが、しかもクーブという清祓儀礼を終えている祭司だけが、燃料を加えることができる。

聖なる火を維持する主体はそれぞれ異なっている。聖なる火をつくり、聖火檀におさめ、聖火

殿を建て、あるいは修復しつつ、その中でたえず聖なる火を維持すべく、特定の祭司に宗教儀礼を委任していくのに必要な財物をまかなう主体は異なる。聖火殿を維持する主体が異なるということは、その維持にかかる経済的負担をまかなう主体が異なるだけにとどまらず、祭司を通してパンタークによって聖火殿にかかわる主体も異なってくるのである。

宗教はこのように宗教的象徴とそれに関係するさまざまな意味を共有し、分有しながら存続変容している。その意味は太古性と残存性をそなえているという特徴をもつが、しかしまた変化を伴ないながら存在してきているのである。

注

1）野村　暢清　1988『宗教と社会と文化』九州大学出版会　pp.1-137　参照

2）Émile Durkheim 1968 Les formes élémentaires de la vie religieuse. Paris. pp.1-138
Marcel Mauss Sociologie et anthropologie. Paris. pp.3-138

3）拙論　『宗教研究』257 pp93～94参照

4）聖火殿内の特定の場所（Urwīsgāh）で行われるゾロアスター教における重要な儀礼（Pāwmahel）の一つである。聖なる火（Dādgāh）を前にして、金属製の容器一式（ālāt）、聖なる水、ザクロ、ハオマ（Haoma）、聖なるパン（Drōn）、聖なる牛の毛（Varasjoji）を用いて行う儀礼であるが、その中心はハマオをつぶして飲む行為にある。

5）ゾロアスター教に於ける清浄儀礼の中で最も簡単なものであり、それ故に最も日常的に行われている儀礼である。『哲学年報』第42輯 pp.47-48　参照

6）B.N Dhabhar, The Persian Rivayats of Hormazar Framarz, Bombay 1932の pp.69～71を参照。「人の死後４日目の夜明け方にgospandの肉が Ātaš Bahrām に必ず捧げられねばならない。そうすれば火の栄光（Adar Xoreh）が činvat の橋の一端に於いて（死者の魂の前に）輝き、その魂に対する裁き（affairs）は容易に行われるであろう。」(p.70)「…もしgospandの肉が供犠されるならば、Ātaš Bahrām にzurとして捧げられるならば、魂は činvat の橋を幸いに渡り、火の栄光と他の Amšaspands は魂を援助し…。」(p.77)

7）火と火が混ぜ合わされないことのほかに火と火は同じ部屋の中に保たれることもない。たとえばナオサリの聖火殿には２つの聖なる火が維持されているが、それぞれの火は壁によって隔絶された聖火檀におさめられている。

8）『西日本宗教学会誌』第６号 pp.33-37参照。

9）パーシーは身体を浄めるのに４つの儀礼のいずれかにうったえる。それぞれの儀礼は、目的と方法において異なる。Pahl. pādyāb はAv.paiti-āpにあたる。文字どおりには水（āp）をふりかける（paiti）を意味する。４つの清祓儀礼のうちで最も簡単な形式のものである。以下その儀礼の内容を示す。まず、'xšnaōϑra Ahurahē Mazudaō'「アフラ・マズダのよろこ

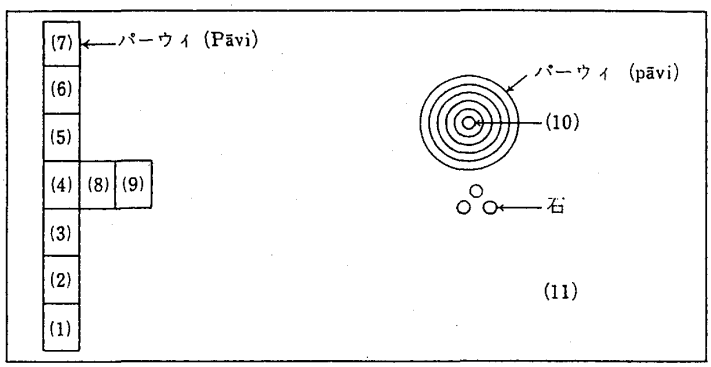
びのために」と唱えたあと、アシェム・ヴォフー（Ašem Vohū）の祈りを唱える。この祈りの意味はつぎのごとくである。「正義は絶対の恵み、正義は美徳、最高の正義を聖別する人は幸福」。これを唱え終わると、顔、手足を水で洗う。つぎに拭く。最後にクスティ（kusti）を行う。Pahl.kustiはAv. aiwyāonghanaにあたる。「方向」、「腰」、「境界」を意味する（J.J.Modi, pp.183-184）。羊毛製の紐で、パーシーはイニシエーション（ナオジョート Navjote）を経て、これを聖なるシャツ（スドレ sudreh）の上から腰にまく。いまや、このクスティをいったん解き、背中でひとつ結び目をつくり、腹でもうひとつ結び目をつくる。その間、先のアシェム・ヴォフーの祈りを唱える。パード・ヤーブは朝起きたとき、大小便のあと、食事の前、祈りを唱える前に行われねばならない。

10）二人の間に手で紐を保つ行為で、死体運搬人（Nasāsālār）が死体を運ぶとき、葬送の行列を組むとき、火の清祓儀礼、アータシュ・ベーラームの灰を取るとき、火の聖別の儀礼のときなどにこれを行う。Pahl.paiwandは「つながり」「子孫」の意味をもつ。またパーウィ（pāvi 宗教儀礼を行う空間で、幅5～6cmの浅い溝で囲んである）も木片のパイワンドでつながれるとパーウィ内の聖度は変わらないで保たれると考えられている。

11）Av. Sraošaから後にPahl. SarōšあるいはPahl. Srōšと変形。「聴く」それゆえに「服従、従順」の意味。Avestaの中では、Sarōšは「宗教を啓示する人（daenō-disō）」、「聖なる言葉（マントラ mānthra）の顕現」としても知られている（K.Mirza, p.101）。サローシュは人と神をつなぐ存在で、昼夜、人の魂をまもるが、とりわけ夜にその保護は強まる。サローシュへの祈りがもっぱら夜に唱えられるゆえんである。昼夜、家や人をまもる犬と、夜明けを持って時を作るニワトリがサローシュと結びつけられる理由でもあろう（J.J.Modi, pp.434-435）。サローシュは悪魔（デーウ Dēv）や虚偽（ドゥルジ Druj）から人をまもる。4日目の明け方に、死者の魂はチンワットの橋（činvatō peretu）に行き、裁きをうける。そのあいだ、サローシュは死者の魂をまもる。そこで、人の死後3日のあいだ、サローシュのため以外にヤスナ（Yasna）の儀礼が行われるべきでない（B.N.Dhabhar, pp.166-167）。

12）Pahl.rimanはAv.riから派生している。「不浄のもの、汚物」の意味である。ナオサリでは、死体によって生じた不浄をこの語で表す。一人の祭司と一人の平信徒が、死によって不浄になった人に対して行う儀礼もリマンと呼ばれる。いまこの儀礼にふれていく。祭司はクーブ（xūb）を経ていなければならない。バレシュヌーム（Barešnūm）清祓儀礼（10日間にわたる清祓儀礼。本来、死によって引き起こされた不浄に接した人を浄める儀礼であるが、ナオサリではすべての宗教儀礼を行いうる祭司の資格をとるときにもこの儀礼を行う。バレシュヌーム・ガーbarešnūm-gāhと呼ばれるバレシュヌーム清祓儀礼のための場所において、二人の祭司が行う。聖なる牛の尿、水、聖なる火の灰、等を用い、犬も出てくる。いまここではバレシュヌーム儀礼には言及しえないのでこれについては火の清祓儀礼との関連でふれていきたい）を終えた朝にヤスナ（Yasna）の儀礼を行えばクーブを得る。

リマン清祓儀礼には以下のものが必要である。聖なる牛（ワラスヨジ varasyoji）の尿、聖なる水（アーゥ Āv)、アータシュ・ベーラーム（Ātaš Bahrām 3種類の聖なる火のうちで最も等級の高い火）の灰（バサム Bhasam)、水さし２杯の水（ひとつは大きく、もうひとつは小さい)、金属製のカップ２，ザクロの木の葉、９つの節をもつ棒（ナオガーNaogar）２本（この棒の一本には、端に聖なる糸で金属製のスプーンが結びつけられ、もう一本には端に聖なる糸で金属製の爪が結びつけられている)。聖なる牛の尿、聖なる水、聖なる火の灰については、これらが聖別される儀礼があるのだが、ここでは省く。リマンはできるだけ人々が足を踏み入れない空き地で行われる。地面に次のような用意がされねばならない。(Pavmahal, p.31.J.J.Modi, p.155)。



(注)　パーウィは地面に溝（幅5.6cm、深さ2.3cm）を描くか、砂を盛るかしてもうける。この中に、不浄になった人がいる。そこでパーウィは、この中にいる人の影が外にいる一人の祭司と一人の平信徒にさしかからぬように、またパーウィの中にいる人が風上にたつことのないようにもうけられねばならない。

祭司はパーウィ(1)の中に聖なる牛の尿、水、聖なる火の灰を置く、身体を浄める儀礼（パードヤーブ pādyāb これについては先にふれた）を行い、聖火殿に付設している井戸に行き水さしに水を汲む。このあと、白い綿のズボン（イジャール ijar）と白いマスク（パダン padan）を身につける。２つの金属製のカップを聖なる灰で洗い、水で３度洗う。このカップを乾かした後、一方に聖なる牛の尿と聖なる灰、他方に聖なる尿を入れる。これを終えて、水さしを聖なる灰であらい、水で３度洗い、聖なる水をその中に入れる。こうして祭司はパーウィ(1)へ引き返す。このころ、不浄を浄めるべき人が、服を脱ぎ地中に埋め、パーウィ(7)に入り腰をおろす。これ以後、どのように動くかについては、(11)に立っている平信徒が無言のうちに身ぶり手ぶりで指示する。祭司は不浄を浄めるべき人には近寄らない。からの影がさしかかってもならないし、風が不浄を不浄を運ぶかもしれないからである。祭司は金属製のカップから、卵のからに聖なる尿を注ぎ、ザクロの木の葉一枚をパーウィ(9)に置く。(11)に立っている平信徒がこれ

をパーウィ(6)に置き、不浄を浄めるべき人に、ザクロの木の葉をかみ、卵のからに入っている聖なる尿を3回で飲みほすよう指示する。卵のからに直接口をつけてはならない。聖なる尿を飲み終えたら、卵のからはつぶされて、土中に埋められる。ここで祭司はパーウィ(1)からパーウィ(3)まで、右手に9つの節のある棒（端に聖なる糸でスプーンが結びつけてある）を、左手には聖なる尿を含む金属製のカップをもって進む。そこから棒を用いて聖なる尿を不浄を浄めるべき人の両手に15回注ぎ、この聖なる尿を体にふりかけさせる。祭司はパーウィ(1)にもどり、少量の砂をとり、パーウィ(3)に進んで、先のように15回にわたって砂を与え体にすりつけさせる。祭司はパーウィ(1)にもどり、小さい方の水さしをとりあげ、パーウィ(3)に進んで、先のように15回にわたって水を与え、体にふりかけさせる。祭司はパーウィ(1)にもどり、大きい方の水さしをとり、パーウィ(9)に置く。(11)に立っている平信徒がこの水さしをとり、不浄を浄めるべき人にパーウィ(3))を離れ、パーウィ(10)に行くよう指示する。平信徒は水さしからゆっくりと3回にわたって水を注いでやる。いまや不浄は浄められた。

13）この慣行に関しておよそ15の書簡が残っており、ここに記した内容は、それらの書簡の骨子のみをとりだしたものである。数字などに若干の異なりがみられるが、火を運ぶという行為と聖なる火をつくるという態度については一貫していると考えられる。

14）これについては、ナオサリのダストゥルジ・メルジ・ラーナとダストゥルジ・フィローズM.コトワルの教示をえた。F.M.Kotwal, Some Observations On The History Of The Parsi Dar-i Mihraにおいても、この内容に関する記述がある。

15）聖火殿の中で行われる儀礼は、パーウィ（pāvi）の中でなされるが、パーウィは通例複数もうけられているので、場合によってはアータシュ・ダードガーを一定の儀礼（これについては別稿にてとりあつかう）にそって、それぞれのパーウィに運び、祭司が儀礼を終えると各々使った火をダードガーにもどさねばならない。もちろん、一人の祭司がパーウィ内で儀礼を行った場合も同じである。

引用参考文献

Rustom Jamas Dastur Meherjirana

1899 *athoran ni tolani Bhagarsath vansavali*. Bombay.

Karl F.Geldner

1896 *Avesta Ⅲ Vendidad pp.67-68*

Kutar Mahiar Naoroj

1929 navsarinan pak atashbeheram sahebnan navan makanne lagto ahaval tathateno avak javakno hisab.

Ervad Dara Soraji Dastur MeherjiRana

1932 Navsarina mota dastur Desai khand anoni Disapothi. Bombay
Rustom Jamaa Dastur MeherjiRana
1899 Athoran ni tolani Bhagarsath Vanshavali. Bombay
Boyce, M.
1975, 1982 *A History of Zoroastrianism*.Vols. I&II. Leiden.
1984 *Textual Sources for the Study of Zoroastrianism*. Manchester.
Boyd, J.W. and Kotwal, F.M.
1982 *A Guide to the Zoroastrian Religion*. California.
1984 "Worshipin a Zoroastrian Fire Temple." *Indo−Iranian Journal* 26. pp.293-318
Dhabhar, B.N.
1932 *The Persian Rivayats of Hormazyar Framarz and others*. Bombay.
1963 *Translation of Zand−i Khurtak Avistak*. Bombay.
Modi, J.J.
1922 *The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees*. Bombay.
Kotwal, F.M.
1977 *Some Observations On The History Of The Parsi Dar−i Mihrs.*
1988 "Initiation into the Zoroastrian priesthood."
Papers in honour of Professor Jes P.Asmussen.
Hommages Et Opera Minora, Vol.XII. Leiden.
Kotwal, F.M. and Boyd, J.W.
1991 *A Persian Offering The Yasna : A Zoroastrian High Liturgy*. Paris.
Kutar Mahiar Naoroji
1929 *Navsari vadi daremehernan thayala navroni fehrest*. 1633-1928. A.D.Bombay.
Navsari Bhagarsath Anjuman
1929 *navsarinan pak atashbeheram sahebnan navan makanne lagto ahaval tatha teno avak javakno hisab*. Bombay.
野村　暢清
1988 『宗教と社会と文化』九州大学出版会　pp.1-137　参照
Émile Durkheim
1968 *Les Formes Élémentaires De la Vie Religieuse.*
Presses Universitaires De France. Paris. pp.1-138
1975 古野清人訳 『宗教生活の原初形態（上・下）』 岩波書店
Marcel Mauss
1950 *Sociologie et Anthropologie. Paris.*

Presses Universitaires De France. Paris. pp.3-138

1973 有地　亨　訳『社会学と人類学（Ⅰ・Ⅱ）』弘文堂

中別府　温和

1981 「ナウサリパーシーの研究—ゾロアスター教徒の聖なる火についての一考察—」
『西日本宗教学雑誌』第6号 pp.12-47

1983 「ゾロアスター教における聖なる火－ナオサリの事例を中心として－」
『哲学年報』第42輯 pp.29-53

「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」
『宗教研究』第57巻257 第2輯 pp.93-94

1983 「ゾロアスター教における鳥葬の塔(DAKHMA)」
原著　DAKHMA IN ZOROASTRIANISH BY DR.FIROZE M.KOTOWAL 1982
『宗教研究』第56巻 255 第4輯 pp.17-30

1984 「ゾロアスター教における聖なる火と清浄儀礼－ナオサリの事例を中心に－」
『哲学年報』第43輯 pp.91-109

1984 「ゾロアスター教における聖なる火とパーラク（養子慣行）について
『西日本宗教学雑誌』第7号 pp.78-87

1985 「ゾロアスター教における死体悪魔(DRUXS YA NASUS) について」
『哲学年報』第44輯　pp.21-37

1993 「インドにおけるゾロアスター教の存続と変容」『宗教間の協調と葛藤』所収
佼成出版社

1995 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」
『西日本宗教学雑誌』第17号　PP.1-15

1996 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と名前の記憶について」
『西日本宗教学雑誌』第18号　PP.13-25

1996 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と名前の記憶について」
『西日本宗教学雑誌』第18号　pp.13-25

1997 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と集団構造」
『宗教研究』71巻3輯　pp.

The Sacred Fires and the Social Structure of the Zoroastrian Parsis.
Bulletin of Miyazaki Municipal University. vol.4

1998 *The Sacred Fires and the Marriage of the Zoroastrian Parsis.*
Bulletin of Miyazaki Municipal University. vol.5

1999 *Historical Development of Panthaks among the Bhagarsa th Priests in Navsari.*
Bulletin of Miyazaki Municipal University. vol.7 No.1 pp.67-85

1999　「ゾロアスター教徒パーシーのガーハンバール（Gahambar）と新年（No Roz）について」
『西日本宗教学雑誌』第21号 pp.17-27

2003　Establishment and Development of Religious Symbols
A Summarized Translation of Navsari Pak Atash Beheram Saheb.pp.131-142
Bulletin of Miyazaki Municipal University. vol.11 No.1 pp.67-85

2004　「宗教的意味の伝達と変容―ゾロアスター教徒パーシーの祈りを材料として―」
『宮崎公立大学人文学部紀要』　第12巻　第１号　pp.163-188
Establishment and Development of Religious Symbols(2)
―Navsari Atash Beheram―
Bulletin of Miyazaki Municipal University. vol.12 No.1 pp.67-85

2005　「宗教集団の移動と定着の過程の一側面―ゾロアスター教徒パーシーによるナウサリ定着過程を事例として―」
『宮崎公立大学人文学部紀要』 第13巻　第１号 pp.227-226
An Introductory Analysis of Prayers Zoroastrian Parsis Prayers in Navsari, India (1) pp.227-244
Bulletin of Miyazaki Municipal University. vol.13 No.1 pp.67-85